

「実現に至らせる神」 聖書・ピリピ人への手紙 2 章 12～13 節

安藤 脩

こういうわけですから、愛する者たち、あなたがたがいつも従順であったように、私がともにいるときだけでなく、私がない今はなおさら従順になり、恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい。神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。

昨年、私の救いについて証し、お褒めさせていただきました。続きを聞きたいと何人もの人々から言われました。そのような人々が教会スタッフにお願いしてくださったのでしょうか、今回このような機会を与えていただき、感謝いたします。ですからご要望に応じ、続きを証しお褒めさせていただきます。

20 歳の誕生日に受洗の決断をしたのは、もう、保護者である両親の許可をもらわなくとも良い成人者になったとの考えからだったろうと思います。幸い、経済的にも 1 ヶ月の授業料 1,000 円、大学の寮費 5,000 円の時代で、奨学金 8,000 円と家庭教師代が入ると、家からの仕送りが 1 円もなくとも足りました。でも私がこのような苦学生であることを知っている教会の人々が、3 年次からは教会の教育館に寝泊まりするよう配慮くださいました。牧師ご夫妻が 80 歳を超えた老牧師だったこともあり、門番としてという思いもあったかもしれません。そのおかげで、教会学校の教師をし、礼拝、祈祷会等教会のすべての集会に出席するようになりました。CS の教師をするためにも聖書を更に読むようになりました。パウロは「恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい」(2:12)と言いますが、主は未熟な私が中途脱落しないようにと、畏れおののく心ではなく、楽しみ感謝の中で成長させようと図ってくださったようです。

一方、学びはというと、大学を卒業する時期になっても歌を歌いたい情熱は消えず、プロになるため再度、東京芸術大学を受験しました。(地方の大学にはこのような卒業してから再挑戦という人々がおりました。宮崎大学の先輩の中にも何人かいたのです) 芸大出身の指導教官も大丈夫と言ってくれていたのですが、私は受験の時、風邪をひき、良く声が出ず不合格となってしまいました。合格するつもりでいましたので途方にくれました。でもその時、教会を同じくし、私のことを良く知っているクリスチャンの教授が、「良かったじゃない。暫く勤めて学資を蓄えてから再挑戦しなさいということでしょう。」と言って推薦状を書いてくださいました。教師採用試験を受けることなく、この推薦状 1 枚で勤めたのが、中高 6 ヶ年教育のミッションスクールでした。ここで 2 年間だけ勤め、再度、芸大を受験するつもりでした。しかし、1 年目の終わり

に、学校の体制が変わることになりました。学校も創立 10 周年を迎え、地域の評判も良く経営的にも安定してきたので、イタリヤ本部のサポートなく独立してやりなさいということになったようです。それまでと大して状況は変わらないのですが、今までシスターが責任を持っていた生徒指導を生活指導部として教師が責任を持つことになりました。その生活指導部の部長として私に責任を持って欲しいというのです。そう言われたとき、先ず頭に浮かんだのは“ありえないこと”という思いでした。なぜなら、一番の若輩者でした。そして、1 年後には学校を辞して、東京芸大を再受験することは就職時点で伝えてあったからです。しかし、今までの信仰体験から、あり得ないことが起こるときは、そこに神様のお考えがあることを知っていましたから、しばらく祈って考えさせてくださいとお願いしました。勿論、祈りの大事さは心得ているシスター方ですから猶予くださいました。それから半徹夜して祈りました。でも、2 週間位で、音楽の道を断念する決断はつきました。なぜなら、高校 3 年の 2 学期からピアノ練習を始めたような者です。自分の音楽の才能がプロになるには足りないことに気付かされるのに時間がかかるはずがありません。しかし、半徹夜の祈りは 3 ヶ月続きました。それは、うまく行っている時は何でもなくても、まずいことか起きて窮地に立つようなことが起きたとき、自分の心に“自分は乞われて残ってやったのだ！”との思いが少しでもあるならば、将来において、学校にとっても、私自身にとっても良くない。“これは神の導きだ”と確信できるのに 3 ヶ月の祈りの期間が必要だったのです。

そしてこの有り得ない人事は、やはり神様のお考えだったことが、後になって解りました。生活指導部の働きで生徒や保護者と多く接するようになりました。そして 3 年目の終わり頃から“私の生涯の働きは学校教育ではなく、人々の心に接して行くことではないか”と示されました。そしてそれは、私にとってはキリスト教の伝道者の道でした。しかし伝道者になるには特別な召命体験があるはずだと思っていました。私の恩師からは夜道を歩いていて、急に天からの温かい何ものかに包まれ、その場にひれ伏した体験があったことを聞いていました。パウロ先生は「使徒の働き 9 章」に記されているような召命体験があります。でも私にはそんな体験はありませんでした。それでも、キリスト教の伝道者への思いは打ち消しても打ち消しても、益々大きくなりました。それで 4 年目の終わりに母教会の牧師に相談に行きました。その時すでに牧師は交代し、初めてお会いする先生でした。私の話を聞いた中山牧師は、にわかには信じ難かったでしょう。その頃、私は鹿児島に住んでいたわけですから 1 年に 1 回、まとめて献金が送るだけの不在会員、いや、週報等も送られてきませ

んでしたから、別帳会員だったかもしれません。中山牧師は神学校の案内の掲載されている本から4校を抜き出して紹介くださいました。でもそれを見てもわかるはずがありません。その年度も越してしまいました。しかし、5年目の10月に母が死に、母の遺体を前に私は心の中で神様に、「母が悪いのではないのです。私があなただを先に知りながら、本気であなたとイエス様による救いを母に知らせませんでした。母を憐れんでください。」と祈りました。その時、集まっていた家族の前で私は、「僕は学校を辞めて、キリスト教の伝道者になる」と表明していました。

私と同じ年にカトリックで洗礼を受けていた姉が、先に献身してシスターになっていました。姉から献身表明があった時、両親は驚き、家族全員を招集し、ホテルに2日泊りがけで家族会議を開いて、シスターになることを思い止まるよう説得しました。姉と結婚したいという人もいましたので、結婚こそが幸福への道との思いが両親には、また、結婚している兄弟たちにもあったでしょう。でも、どんなに説得されても思いを変えることのなかった姉のキリスト教信仰を経験していた家族は、私の献身表明に関しては全く無言でした。

3月で学校を辞し、再度、母教会に行き決意を伝えました。そして紹介された中から、何の準備もない私が入学できるとすれば、この神学校かなと思える、塾のような「東京聖書学校」に行きたいと伝えました。そうしたら中山牧師が、そこは自分も学んだ神学校で、この宮崎清水町教会の信仰の流れの神学校だと言われたのです。そして「4月にこの信仰グループの年会があるので、まず一緒に行ってみましょう。」と行ってくださったのでした。

すべての荷物を実家に預け、5年間の貯えだけを持って母教会へ行きました。先にも話しましたように、この教会の教育館は大学の3、4年生の時、私の寝泊まりした場所でした。その部屋に1泊し、日曜の礼拝で献身の証をするよう言われておりました。その懐かしい部屋で寝る前、何心なく本棚から1冊の本を抜き出し読み始めました。すると今日の聖書箇所である聖句「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされる場所だからである。」(ピリピ人への手紙2:13 口語訳)が目に飛び込んできたのです。(その頃私の読んでいる聖書は口語訳聖書でした。)そして心が熱くなり涙が溢れました。「自分で伝道者になろうと決意したのじゃない。その思いを起こさせてくださったのは主だったのだ。それなら主が実現へと導いて下さる」と確信できたのでした。

本来、神学校の入学試験は2月にあるらしいのですが、この年のみ4月の年会が終わった後、行われました。それはこのグループの代表者であり、神学校

の校長でもあった牧師が直前に召天されたため、入学試験も遅れたのだということでした。私は1年間は大学時代のように、どこかの教会の門番みたいに寝泊まりさせていただき、その間に入学のための準備をすればよいと気楽に考えておりましたが、主の憐れみにより受験を許され、この年、入学することができました。

その年の新入生は9名でした。入学式を終えると神学校の何人かの先輩たちが私のところにやってきて、「君が宮崎清水町教会の安藤君か、祈っていたよ！」と言うのです。私の全く知らない人々です。でも彼らは顔を見たこともない私のために祈ってくれたのです。次の日、早天祈祷会に出て解りました。“嗚呼、ここで私も祈祷課題に挙げられて祈られていたのだ”ということが。

あなたがたが知らなくても、あなたのために祈っていてくれる人々がいることを忘れないで欲しい。“あなたが真の献身になるように！”と。でも献身とは伝道者への献身ばかりではありません。一般の信徒としての献身もあるのです。「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれた」(ローマ5：8) イエス様は私たちのために身を献げてくださいました。私はこのイエス様のような愛の人になりたい。イエス様に似た者になるということは、イエス様に身を献げて行くことです。私が受洗したとき与えられた御言葉「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」(ヨハネ 15：16 a 口語訳)の後半には「あなたがたが出かけて行って実を結び、その実がのこるように」(: 16 b)とあります。自分はどんな実へと成長するのだろうか。そして私の蒔いた実は何れだけ残るのだろうかと思う時「恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい。」の御言葉が響きます。でも「わたしの名によって父に願うものは何でも与えられる」(ヨハネ 15：16 c)との、私たちの祈りへの約束があります。召命体験がない私は、母教会の教育館二階座敷で、不安とおそれの中で祈りました。何と証しようか？自分には召命体験がない。自分でそのように願い献身する、いわば志願兵だ。もしかすると、主は「わたしはあなたを伝道者へと召してはいないよ！」と言われるかもしれない。その時は、「そのことはウスウスわかっていました。でも、母のこともあって、もっと本気であなたによる救いを伝えられる者になりたいと思ったのです。」と言うなら、「そこまで言うなら、しかたがないか！」と許してくれるのではないかと。そのとおりにになりました。主は誉むべきかな！主のみ言葉は真実です。願いを起こさせた主は、それを実現に至らせるだけでなく、いつも共にいて、さらに優れた祝福を与えてくださいました。あなたにも主は「わたしにあなたの全てを委ねなさい！」と言っているのではないのでしょうか。

